

## 曲直瀬玄朔の医書出版

—『医学正伝』について—

天野 陽介, 小曾戸 洋

北里大学東洋医学総合研究所

曲直瀬玄朔(1549~1631)は、初代曲直瀬道三(1507~94)の妹の子として京都に出生。名は正紹、号は東井、院号は延命院・延寿院、玄朔はその通称。天正9年(1581)、初代道三の孫娘を娶り曲直瀬家を継ぎ道三を襲名、江戸末期まで続いた御典医・曲直瀬今大路家の祖となった。玄朔は道三の跡を受け、医学文化の普及に大きく貢献した。古活字版による医書出版もその一つである。玄朔が関わった古活字版医書出版には『医学正伝』『玉機微義』『難経本義』などが知られている。このたび、玄朔が関わった『医学正伝』の出版について調査をしたので報告する。

『医学正伝』は、明の虞搏(1438~?)が正徳10年(1515)に著した医方集。朱丹溪の学説を中心に、諸家の医説を採用して編まれている。日本へは早くに伝わり、曲直瀬道三『啓迪集』(1574年自序)にも多く引用されるなど、わが国の漢方医学に及ぼした影響は大きい。

はじめに、『医学正伝』諸本について、先行研究を参考に、可能なものは実見し、中国刊本、朝鮮刊本、日本刊本を調査した。

その結果、曲直瀬玄朔の跋が付された日本刊本には次の5種があった。①『新編医学正伝』慶長10年(1605)下村生蔵刊古活字本(『古活字版の研究』所載、未見)、②『新編医学正伝』慶長12年(1607)刊古活字本(杏雨書屋蔵)、③元和2年(1616)六条鏤版古活字本(都立中央図書館蔵)、④『新編医学正伝』古活字本(研医会図書館、復旦大学図書館)、⑤『京板校正大字医学正伝』元和8年(1622)村上平楽寺刊整版本。

①には慶長8年(1603)玄朔跋、②には道三によると思われる跋文と慶長9年(1604)玄朔跋、③には慶長8年吉田意安跋と同年玄朔跋、④には慶長9年玄朔跋、⑤には永禄12年(1569)道三跋と慶長9年玄朔跋が付されている。玄朔の跋文には慶長8年、慶長9年(2種)の計3種がある。これらによると、道三は天文17年(1548)以前から20余年『医学正伝』を閲読、これに深く通じた。曲直瀬流では『医学正伝』を重用したが、当時善本がなく、斎藤松印(玄朔門人)・医徳堂守山(意安門人)親子が諸本を校合して出版に至った。

次に、玄朔が関わった諸本においてどのような校勘作業が行われたか、巻2を対象として調査した。諸本において異同箇所は様々あったが、いくつかを例示する。

半葉の行数字数は①②③は朝鮮刊本と同じ12行20字、④は11行20字、⑤は13行24字であった。瘟疫門の脈法「瘧病八九日」条で「脈来牒牒」とするものは③⑤、「脈来澁澁」とするものは④であった。他本で「澁澁」とするものには嘉靖18年(1539)刊『医経正宗』(内閣文庫蔵)、『新編医学正伝』朝鮮甲辰活字刊本(中之島図書館)、『新編医学正伝』慶長2年(1597)小瀬甫庵刊古活字本があった。また、火熱門の「紫雪治内外煩熱……」条で「半日待薬凝定入下項薬……」の「待薬凝定」があるものは④、ないものは②③⑤であった。他本でこの4字があるものは『医学正伝』陳心学等校・万暦6年(1578)顧爾行序・同年辺有猷序重刊本(杏雨書屋蔵)(研医会図書館蔵)であった。⑤は『新刊京板校正大字医学正伝』万暦5年(1577)金陵呉松亭刊本によると思われるが、内閣文庫所蔵の呉松亭刊本には⑤にある嘉靖10年(1531)史梧跋がなく、和刻本出版の際に補入された可能性がある。また、②は他書に見られない嘉靖10年(1531)蔣詔「医学正伝後序」があり、『医学正伝』の来歴を知るうえで貴重な資料といえる。

玄朔が関わった『医学正伝』刊本では、跋文に記されるように中国・朝鮮刊本を使用し、校勘作業がなされていた。また、慶長10年前後には玄朔と門人らによって中国医書を中国・朝鮮刊本を用いて校勘し、古活字版出版が盛んに行われていたといえる。